http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogaigakushu/kyodo/kyodo_top.html

ちば市史編さん便り

千葉市史編さん担当
〒 260-0856
千葉市中央区亥鼻 1-6-1
千葉市立郷土博物館
℡ 043-222-8231

Chiba-shishi News Letter NO.7 2011.10

【『千葉市史史料編近現代』へ向けて】平成 23 年度市史研究講座（前期）「千葉市の夜明け」が開催されました。

本年度、千葉市史研究講座は「千葉市市制施行 90 周年」を記念し、前期のテーマを近現代に絞って行いました。

江戸時代、千葉町には佐倉藩の役所が置かれており、また妙見寺（現在の千葉神社）の門前町として町場化していましたが、やはり当時流通の拠点であった銚子や船橋・佐原などに比べ、その規模の小ささは否めませんでした。しかし県庁が設置され県の政治の中心地となったことや、軍隊が来て軍都となったことで一気に発展していくことになります。本講座では、そうした「千葉」の様子を四人の先生方にお話していただきました。

第一回では三浦茂一先生に「『千葉繁昌記』と藤井三郎」、中澤惠子先生に「明治初期に行われた薬販売の一例」の二講演を、第二回では神山知徳先生に「市制施行前夜の千葉町」、小林啓祐先生に「市制施行と千葉市民」の二講演を行っていただきました。

各講座の詳しい内容については、これから発行される『千葉いまむかし』等で紹介していく予定です。

（簡単な内容は裏面をご参照下さい）

今回の講座は、6/12 と 7/17 の二日間（何れも日曜日）に開催されました。それぞれ 117 人・91 人と多数の方に受講して頂きました。暑い中、ご参加頂きまして本当にありがとうございました。

講演は、それぞれの時間が短いにもかかわらず、どの先生も非常に内容の濃いものでした。なかでも神山先生の講演後は、質問を受け付けたところ、先生の提示した写真について受講者の方よりたくさんの意見・情報が寄せられ、とても活発な議論が交わされました。時間さえ許せば、もっとじっくりそれぞれのお話をお伺いしたいところでしたが、残念ながら途中で切り上げることになってしまいました。今後はこうしたディスカッションの場をもう少し設けることができたら、と思います。

次回は、11/12（土）に行う予定です（詳細は最終ページをご覧ください）。毎回、人気の高い中世がテーマです。多くの方のご参加をお待ちしております。

資料、求む。

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。

たとえば、ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることができる貴重な資料です。

いわゆる「古文書」も大歓迎です。

聞き取り調査も行いたいと思っています。戦時中の体験、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話いただける方がおられましたら、ご連絡ください。

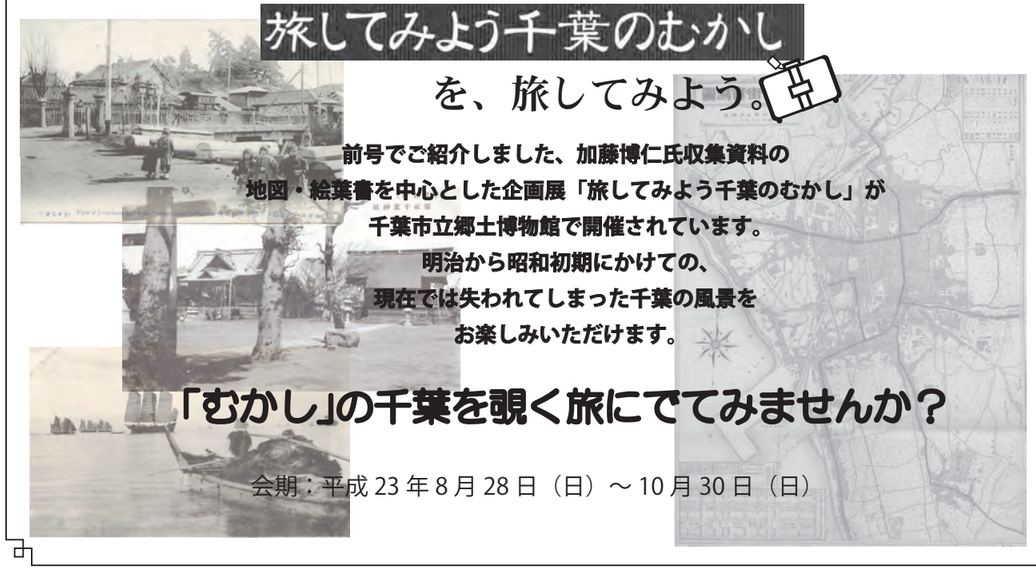
ご提供頂いた資料、伺ったお話の内容の扱いには、十分配慮致します。

皆さまからの情報提供をお待ちしています。

千葉市市制施行 90 周年記念企画展

旅してみよう千葉のむかし

を、旅してみよう。



前号でご紹介しました、加藤博仁氏収集資料の地図・絵葉書を中心とした企画展「旅してみよう千葉のむかし」が千葉市立郷土博物館で開催されています。明治から昭和初期にかけての、現在では失われてしまった千葉の風景をお楽しみいただけます。

「むかし」の千葉を覗く旅にでてみませんか？

会期：平成 23 年 8 月 28 日（日）～ 10 月 30 日（日）

平成23年度 千葉市史主催講座(後期)のご案内

1　市史研究講座

定員 200 人。会場；千葉市民会館小ホール。
対象；千葉市に在住・在勤・在学の方。
各講座 80 分（13:20 ～を予定）。
市政だより 10 月 15 日号で募集します。

（前期）　千葉市の夜明け―市制施行 90 年―	
＊前期の講座は終了いたしました。ありがとうございました。	
（後期）　中世の千葉と千葉氏	
11/12（土）	室町時代の千葉氏 石橋一展氏（野田市立北部小学校）
	中世千葉の経済と信仰 湯浅治久氏（市立市川歴史博物館）

2　古文書講座

初級古文書講座（後期）

古文書読解初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。全 5 回。講師は高見澤美紀先生（千葉市史編集委員）。日程は 10/29・11/5・11/19・11/26・12/3（何れも土曜日、13:30 ～ 15:30）を予定。

※前期・後期は同じ内容のため、本年度前期を受講された方は受講できません。予めご了承ください。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全 5 回。
講師は後藤雅知先生（千葉大学教育学部准教授）。
日程は 12/9・12/16・（2012 年）1/20・1/27・2/3（何れも金曜日、13:30 ～ 15:30）を予定。
＊初級古文書講座（後期）は市政だより 10 月 15 日号、中級古文書講座は 11 月 15 日号で募集します。
どちらも定員 30 人。会場;千葉市立郷土博物館講座室。
日程を変更する場合があります。

どの講座も往復葉書でのお申し込みです。
住所・氏名 (ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください。
（葉書一枚につき一人のご応募をお願いいたします）
詳細は市政だより・郷土博物館 HP でご確認ください。
http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogaigakushu/kyodo/kyodo_top.html
※申込み多数の場合、抽選となります

あとがき

ちば市史編さん便り 7 号をお届けします。

本号では、今年が千葉市市制 90 周年にあたるということで、近現代にテーマを絞って開催した市史研究講座（前期）についてお知らせいたしました。『千葉市史　史料編　近現代』編さんへの足がかりとしても、有意義な講座であったと思います。講演を引き受けてくださった先生方、またご参加いただきました多くの方々に、改めてお礼申し上げます。

前号でお知らせしました三浦茂一先生の児玉幸多賞授賞式の会場名が誤っておりました。正しくは「メルキュールホテル成田」です。先生、関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

講座「千葉市の夜明け」からみる「夜明け」前後の千葉

もしも千葉の「夜明け」が市制施行であるとしたら、その前後で千葉はどう変わったのでしょうか？
今年の市史研究講座の、各先生のお話になった内容から、その変化する様子を探ります。

「実測千葉市街図」（明治 40 年 1 月 7 日初刷）

1日目①
『千葉繁昌記』と藤井三郎
千葉市史編集委員　三浦茂一先生

藤井三郎（藤井教厳）は、『千葉繁昌記』の作者の一人です。藤井は、安政 4 年 (1857) に生まれ。明治 40 年 (1907)、51 歳でその生涯を閉じました。18 歳で宗教大学に入学、卒業後は教員となり、23 歳で明治義塾を設立、同じ頃松風山大覚寺 27 世住職に就任しました。約 11 年間の住職在任の傍ら、『啓蕾新誌』『文学雑誌』を刊行し、また小学新聞を発刊するなど、「言論人」としても活躍しました。

明治 22 年には、東葛飾郡塚田村の村長に就任、 4 年間在職しました。退任した翌月には、『総房人物論誌』という冊子を刊行しています。

藤井三郎が『千葉繁昌記』を刊行した頃（明治 28 年）の千葉町の人口は 21,599 人。明治 6 年千葉県成立後、県都となった千葉町には、新たに官庁や学校が進出して官庁街を形成、それと共に市街地が拡大し、人口が増加していくことになったのですが、当初の人口統計をみると明治 7 年は 3,110 人で県内 9 位、同 13 年には 5,817 人で県内 4 位（いずれの年も 1 位は銚子町）、同 22 年にいたってようやく県内 1 位となり、その後は人口がどんどん増加していきました。

藤井三郎の書いた『千葉繁昌記』 には、そうして加速度的に発展していった時期の千葉町の様子が描かれています。

ぶれいく& What's『千葉繁昌記』???

明治 24 年 (1891) と明治 28 年の二回、同タイトルの冊子が出版されました。どちらも千葉町にあった様々な施設や商店などの千葉町の様子及び風俗を記した書物です。しかしそれぞれ作者が異なり、前者は「雀巣子」（当時の県会議員永田一茂）、後者は「松風散史」が書いたものです。この「松風散史」は、三浦先生の講演にあった「藤井三郎」とされています。どちらも当時の千葉町の様子を描いた書物ではありますが、それぞれに違いがあります。前者の永田一茂のものは旧自由党系のカラーを帯び、時折図が用いられています（下は「千葉町繁栄之図」）。後者の藤井三郎のものは改進党系の視点でまとめられており、また役人の名前や商店主の名前など前者に比べ詳しく載っています。年代も近く、それぞれに特徴のある二つの冊子です。読み比べてみるのも面白いかもしれません。

『千葉繁昌記』（成田仏教図書館蔵）より

＊『千葉繁昌記』にご興味を持たれた方は、『千葉いまむかし』№1 掲載の三浦茂一「『千葉繁昌記』の二人の著者について」もぜひご参照ください。

1日目②
明治初期に行われた薬販売の一例
－柏井の川口家文書から－
千葉市史編集委員　中澤惠子先生

本講演の中心となる川口家は、江戸時代に北柏井村（現花見川区柏井町）の名主を務め、明治以降も村内の有力な地主として続いた家です。

売薬事業は、８代目新之丞が始めます。新之丞は高松保郎が「誰でも容易に薬を入手可能にする」という理念により設立した愛生館に賛同、明治 22 年 (1889) に愛生館第一支部雷鳴堂を設立しました。愛生館の営業にあたっては、元陸軍軍医総監松本順（幕末の蘭方医）から伝授された製法により薬を製造、各地に請負・大売捌（支部など）を置き、販路拡大を図りました。

しかし、愛生館（高松保郎）と新之丞との間に確執が生じたため、新之丞は愛生館と別に太平洋薬店を作り営業を開始します。その営業方法は愛生館と同じ方法でした。このとき、松本順が推薦文を寄せています。結局この事業は次の世代に受け継がれずに終わったようですが、明治 34･35 年ごろまでは営業記録が残されています。

2日目①
市制施行前夜の千葉町
千葉市史編集委員　神山知徳先生

明治 20 ～ 30 年代、千葉町の財政はその多くが小学校費に費やされ、更に明治 27 年 (1894) に設置された公設消防の経費も多額でした。

同じころ、千葉町会では自由派と進歩派が激しく対立し、町内の政治対立・不和が続いていました。そうしたなか、明治 39 年 (1906)、加藤久太郎が町長に就任、町制改革を始めます。このころの千葉町は鉄道の乗り入れや電話の開通、千葉電灯株式会社設立など徐々にインフラが整備されていました。加藤久太郎は、寒川築港・町税未納整理・役場事務整理・消防設備近代化などの町制改革を掲げましたが、明治 44 年、志半ばで辞職しました。

以後千葉町は、県都・軍都として成長を続け、町財政規模は急激に拡大していきました。

2日目②
市制施行と千葉市民
－市民の期待と実際－
千葉市史編集委員　小林啓祐先生

大正 10 年 (1921)、市制施行により千葉市が誕生、これは全国の道府県庁所在地のなかでもかなり遅く、原因は財政的不備とされています。

当時千葉市の発展に対し市民は「愛市」という言葉に象徴される精神的な成長の必要を感じていましたが、一方インフラ整備は必要であり、期待も寄せていました。主なものは道路と下水問題で、道路については大正 11 年に市街計画調査委員会を設置、市街計画線 357 線を計画しましたが、関東大震災･昭和金融恐慌･昭和恐慌のあおりを受け頓挫してしまいます。

昭和 5 年 (1930) 都市計画法適用によって再びインフラ整備の機運が高まり、土地区画整理・市街地の環境整備が行われました。下水道は昭和 11 年から建設が開始、第一排水区（本町ほか）は昭和 13 年に完成しましたが、結局その他の地域の整備は戦災復興計画を待つことになりました。